

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	教員という仕事
別タイトル	Teaching in medical school
作成者（著者）	中野, 弘一
公開者	東邦大学医学会
発行日	2018.09.01
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 65(3). p.131 131.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	巻頭言
著者版フラグ	publisher
JaLDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.2018_029
メタデータのURL	https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD12104392

教員という仕事

中野 弘一

教育研究支援センター・産学連携本部

随分長く教壇に立ってきたが、そろそろ退任である。もっとも還暦を過ぎた頃からは学部の教育にはほとんど関わらなくなっていた。卒後六年で講師を拝命しすぐに系統講義を受け持つようになり、以来全ての学年の座学や実習の教育に携わってきた。直接の心療内科臨床を共に携わった徒弟たちは私が医局を離れて医学部の管理業務の専任になっても訪ねてくれ、一緒に学び続けた。ケースのスーパービジョンをしたり、一緒に脳波を判読したり、論文の指導をしたりと学習関係は継続していた。私が身に着けた専門技術を伝授する関係である。臨床技術のノウハウを伝えることは実務的であるので学習関係は継続しやすかったのだと思う。この技術の伝達だけの教育でも身に余る仕事であったと言えると思う。

私の学部教育を受けてくれた大部分の医学生は心療内科でない他領域の医師として社会に輩出していった。医学部での教育では聞いてくれる一学年の学生数が少ない反面、多くのものが長く現役で医学医療の中で仕事に携わっている。私は管理業務を担当することになっても、大学から離れている教え子たちに色々な形で接するチャンスがあり、教えたことのフィードバックを受けることができ、ここにも私の幸があった。

研修センター長を拝命していた頃、関連病院の医師派遣の相談のため、長野にある市立病院を訪ねた。話し合いが終わり、大森病院時代に公私ともにお世話になった院長に夜食事を一緒にいただくことになった。医局から派遣されていた脳外科の医局員も付き合ってくれた。「研修センター長の中野だ、お前ら知らないだろ」と院長が二人に紹介してくれた。「知ってますよ、中野先生には四年生の時に心身医学の授業を受けました」と答えてくれた。今度は私が「うそつけ、授業なんか出なかったんじゃないの?」と切り返した。「そんなことはありませんよ、今でも覚えていますよ、昨日こういうことがあったとアンブタの時の同意の話がされましたよね」と脳外の後輩が話した。「確かに

僕の系統講義みたいだなあ」と私が驚いた。「でも試験に出たみたいな神経性食欲不振症でしたっけ?それは全部忘れましました」と笑っていた。卒業後十年以上経ち、全く別の領域を専攻していても、自分の講義内容が当時の生徒の記憶の中に残っていたことに驚愕した。

また医学教育学会の主催する臨床倫理のワークショップに研修生として参加したことがあった。アイスブレイクの時事務局長を務めていた僻地の診療所の所長をされていた方から、「卒業前に夏休みを利用して大森病院を訪ね、登校困難を主訴にした過敏性腸症候群の高校生をインテークして中野先生の初診の外来に陪席させていただいたことがあります。」と挨拶してくれた。他学の別領域を専攻している医師たちにも私との学びの体験が広がっていたことを知り、更に驚いた。

先日、付属の一貫校から東邦に進学したものの集りが品川のホテルで催され、随分歳若い後輩たちに囲まれていた。「私が医学部に入って初めて受けた教えがフレキャンの中野先生でした」とか「一番印象深かった授業を聞かされて映画の選択授業を思い出しました」「卒業謝恩会の時に自分の両親に大学での活躍ぶりをお伝えいただいたら、私の涙が止まらなくなってしまいました」など海馬に埋もれていた古い教授体験を回想してくれ、老人を労わってくれた。

私の生物学的DNAの伝達は我が子二人に受け継がれているが、我が魂のDNAは医学部教育に携わることが出来たおかげで、医局員に、専攻を異にする卒業生にそして病院臨床や講演会を通して接した職種の異なる方々にまでお伝えすることが出来たのかもしれないと思うと身に余る。

徐々に物忘れもはじまり、どこかで私の命の終末を後輩たちに面倒を見てもらうことになる。医学教育に携わり、恵まれすぎた世界での教員役割を享受させていただいたことを振り返ると、幸多き人生に感謝しかない。

DOI: 10.14994/tohoigaku.2018-029